

# 子どもたちの発達段階や個を育むための 小学校低学年教育のあり方

— ニュージーランドにおける研修を通して —

Support to the Development and Individuality of Lower Grade Children  
in Primary Schools : From a Research on Education in New Zealand

片 田 玲 子\*      鳥 海 順 子\*\*  
KATADA Leiko      TORIUMI Junko

**要約：**幼稚園教育から初めて学校生活をスタートさせる小学校低学年の子どもの心理的段差を配慮した指導は重要だと考える。日常の学習指導や学級経営において、カウンセリングマインドの基盤を持ち、児童の心身の発達段階を考慮するなかで個を生かす教育がなされなければならない。そのための授業展開や指導法をニュージーランドにおける幼稚園や小学校教育の実態と心理的段差軽減のための指導を通して考察した。

**キーワード：**小学校低学年教育、幼稚園教育、心理的段差、  
発達や個を育む教育、ニュージーランドの教育

## 1. はじめに

児童数が減少しているにもかかわらず、子どもたちの心身の発達過程における心の問題は、学校教育現場において「不登校」「いじめ」「学級崩壊」「暴力行為」等の形となってあらわれ、不登校にいたっては前年度より4000人増え全国で13万9000人という驚くべき数字となっている<sup>1)</sup>。小学校においてはその数は中学校や高校に比べると少ないものの、暴力行為やいじめの低年齢化が懸念されている<sup>2)</sup>。現実には数字となって表われてはいないがその傾向がみられる子どもたちのことも考えると、もはやそのような現象は特別な事ではなくなり、教師の経験年数や資質にかかわらず新任教師でも常に関わる可能性が高くなっている。学級崩壊などは経験年数があるベテラン教師のクラスでも発生し、今までの経験だけでは通用しないというむずかしい面も見られる。また担任教師は一年間というサイクルのなかで現実的な解決方法へのより機敏な対応が必要となること、さらに中学校・高校において問題を抱える教師の多くは、思春期の難しい年齢になっている子どもたちへの対応に困難さを感じていることが多い。

そのような状況の中から、初めての学校生活をスタートさせる小学校教育の六年間は大切な時期であり、特にそのスタート地点となる低学年での学習に対する基本的な考え方、人間としての生き方、他者との関わり方等は、これからの学校生活に影響を与えていると

---

\*甲府市立穴切小学校    \*\*教育実践総合センター

いえる。そこで私達小学校教師ができる事、すべき事はなにかということについて二つの面から考えてみたい。その一つは、現に問題を抱えている子どもへの対応という面でカウンセリングやコンサルテーションの力をつけていかなければならないということである。特に小学校においては常駐のスクールカウンセラー（臨床心理士）がまだ導入されていない学校が多い中で、校内の組織を有効に活用しつつ担任教師が全面的に関わっていくことが多い。教師が専門的なカウンセラーの役割は出来ないが、子どもの心理的発達段階を理解した上でカウンセリングの基本的な考え方を学び、早期のうちに問題を克服していけるようきめ細かな配慮や指導で集団の中で根気よく育てていくことが大切であると考え。低学年の自我がまだ十分発達しておらず超自我も未発達な時期だからこそできる事があるのではないかと考えると、早い時期の生徒指導における適切な初期対応の重要性を感じる。

もう一つの面として、そのような問題を抱えた子どもたちを増やさないということから小学校低学年教育について考えてみたい。子どもたちの一日の学校生活の全般に関わる小学校であるが故に個を見つめ個を生かすという考えに立ち、カウンセリングマインドを基盤とした日常の教科学習指導や学級経営が重要になってくると考える。

ここでは、日本の幼稚園教育やニュージーランドにおける幼稚園と小学校教育の実態を参考にして、児童の心身の発達や個を育む教育をするための授業展開や指導、幼稚園教育から初めて学校生活をスタートさせる小学校低学年における子どもたちの心理的段差を考慮した指導を考えてみたい。

ここでいう「心理的段差」とは、「幼稚園教育から小学校教育に移行する際に、子どもの内面に生じると思われる心理的なギャップ」を指すこととする。

## II. 研修先

### 1. 山梨大学教育人間科学部附属幼稚園公開保育研究会

平成 14 年 6 月 21 日 午前 9 : 00 ~ 12 : 30 公開保育の参観・分科会

テーマ「育ちの過程の連続性を考える」ー幼小の連携を通してー

3 歳児 20 名保育者 2 名・4 歳児 52 名（2 クラス）保育者 3 名

5 歳児 58 名（2 クラス）保育者 2 名

### 2. NewZealand Queensetown Kindergarten

平成 14 年 8 月 1 日 午前 9 : 00 ~ 11 : 30 保育参観

園児数約 70 名保育者 6 名（保育者は同年齢の 10 名程を担当）

### 3. NewZealand Queensetown Primary School

平成 14 年 8 月 2 日 午前 9 : 00 ~ 12 : 00

YEAR 2（2 年生）のダンス・社会・国語の授業参観

教師は 1 クラス 20 ~ 23 名程を担当し教科によって AT（Assistant Teacher）が補助

## III. 幼稚園教育の自由保育から小学校低学年教育への心理的段差

### 1. 幼稚園における自由保育（山梨大学教育人間科学部附属幼稚園公開保育）

ここ数年低学年特に新一年生の指導に難しさを感じる教師の声を多く聞くようになってきた。その理由の一つとして、幼稚園教育における「自由保育」と小学校教育とのギャップ

プが考えられる。今回「自由保育」の公開研究会に初めて参加し幼稚園児の一日の生活にふれてみて、子どもたちが自分たち個々の思いや願いに沿った活動をしていることがわかった。一見自由気ままに勝手な行動をしているように見えるのだが、そこでの自由な時というのは、幼児の時でしか体験できない生き生きと夢中になって何かをし輝いている貴重な時であるように思えた。指導者全員が子どもたちの見取りをしっかりとした中で、一人ひとりを認め個々の発達や集団としての成長の姿を追いながら個々の特性に合った支援を目指し、子どもたちの思いや願いが満たされた状態で活動が出来るような配慮がなされていた。「友達や他を受け入れるには自分の良いところを感じ自信や自尊感情を持つことが大切である。」という観点は小学校でもいえる事であり生かしていなくてはならない点である。入学すると子どもたちは新しい環境の中で緊張してしまい今まで培ったものを生かしきれていないのではないか。ということから幼小の教育の独自性を大事にしながら幼児期から学童期における子どもの発達の連続性について研究がなされてきている<sup>3)</sup>。

## 2. 基本的な考え

上記のような自由保育の中で培った子どもたちの力を小学校教育の中で生かし、無理のないかたちで学校生活をスタートさせていくにはどのような指導が必要だろうか。それには子どもたちには個々の連続した発達段階がありその流れの中で今の状態があるということを理解しなければならない。大きな段差では困難な子どもも、小さな段差なら何回かのスモールステップで上がれるという考えから個々の特性を配慮したきめ細かな指導が大切だと考えられる。しかし他学年と同じ学校生活の忙しい時間の流れの中に子どもたちを乗せようと「一斉に、速く、正確に、同じ方向に」という気持ちが先行し「見たい、聞きたい、やってみたい」という子どもの気持ちを汲み取る余裕がなく教師の一方的な押し付けになってしまうこともあるのではないだろうか。初めての学校での活動に対して子どもたちは「なぜだろう、どうしてかな」という素朴な疑問を持っている。それらを受け止めず教師主導で指示しているときは、子どもたちは混乱し自分勝手な行動をしてしまうことが多く教師が注意する回数も多くなる。教師の集団生活に対するきちんとした指導は大切であるが、訳がわからず注意されたり叱られたりということが積み重なっていく時大人でも心が傷つくだろう。ましてや発達過程の幼い子どもの心に与える影響は大きいと考える。子どもたちが納得するように「どのようにしたらよいか、どんなことがしたいのか、どんなことができるか」を個々の状態を把握した中で話し合いながら進めるようにしていくと、新入児でもその活動の楽しさや良さを理解し意欲的に行動できるようになってくるということは過去の経験から感じることである。そのようなことから今回訪問したニュージーランドでは、一人ひとりの才能や興味を引き出し育てることを大切にしている教育という点で学ぶべきことが多かった。幸いにも新教育課程では「ゆとり」の大切さがいわれ時間割や時程も弾力的に扱えるようになったり、また生活科や総合的な学習の時間という今までにない新しい発想で学習できる時間が学校裁量で行えるようになったりしてきた。これらの「ゆとり」を子どもたちの実態に適したかたちで段差の軽減に使えるのではないかと考える。実際に子どもたちを指導してみるといろいろな特性を持っていることがわかる。個々の特性や発達段階をしっか

りと理解した上での「ゆとり」を持ったいてねいな指導は、時間がかかり回り道のように子どもたちの心の問題を考えた時、近道であるように思う。公立小学校の場合は、いくつかの特色ある保育がなされる幼稚園や保育園から入学してくるという難しさもあるが、だからこそ子どもたちの個々に培った力を把握し段差を配慮した小学校教育の指導の工夫をしていかなければならないと考える。

#### IV. ニュージーランドにおける幼稚園教育と小学校低学年教育

イギリスからの移民の子孫を中心とする国であり、伝統を重んじる堅実的なイギリスの教育制度をとり入れながらも歴史が新しいせいか柔軟できめ細かな教育がなされ、個々の違いを受け入れるというニュージーランドの教育について関心を持っていた。そのような中で、ニュージーランドの幼稚園や学校を視察する研修の機会を持つことができた。

##### 1. 教育制度とカリキュラム

新学期は1月から始まり12月で学年が終わる。幼稚園である Kindergarten は、3歳～5歳の誕生日までで、義務教育は YEAR 1～8（5歳～12歳）までの初等教育（Primary School）と YEAR 9～11（13歳～15歳）までの中等教育（Secondary School）とを合わせた11年間になる。その区切りや中等教育の名称は多少地域によって違う事もある（Intermediente Low 1,2等）。初等教育は Primary School と呼ばれ日本でいう入学式というものはなく、この地域では多くの子どもが5歳の誕生日の次の日から小学校へ入学する。

ニュージーランドの学校制度のカリキュラムは7つの学習領域に分かれている。最初の11年間でこれらすべての学習領域において教育がなされ、「YEAR12」になると専門領域に集中して学習できる。

##### ● Learning areas（7つの学習領域）

Language and Languages	（言語と外国語）	Mathematics	（数学）
Science	（科学）	Technology	（科学技術、応用科学）
Social Sciences	（社会科学）	The Arts	（芸術）
Health and Physical Well being（保健衛生と体の健康）			

それぞれの領域科目において必須項目を記したカリキュラム要綱が教育省から出されていて YEAR13 までの指導すべき要綱が載っている。それぞれのカリキュラムは8つの発達段階（8 Achievement LEVEL）の順序で構成されている（図1）。全ての子どもが同じペースで進学するようになっているので一つの学年で異なったレベルの子どもがいることになるが（例えば YEAR 1 の学年に LEVEL 1 と LEVEL 2 の子どもがいる。）教師は同じ教室の中でその子どもに適した指導法を準備し、柔軟な姿勢で指導にあたっている。どのような題材を授業で取り上げるか、どのような教科書や教材を扱うか自分で決めることができカリキュラム要綱に示された広範囲の必須項目にあてはめて授業を行う。

(図1) 学年とレベルとの関係<sup>4)</sup>

学年	Y 1	Y 2	Y 3	Y 4	Y 5	Y 6	Y 7	Y 8	Y 9	Y10	Y11	Y12	Y13
													8
													7
													6
													5
													4
													3
													2
													レベル1
	J 1	J 2	J 3	S 2	S 3	S 4	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	F 6	F 7

## 2. 幼稚園 (Kindergarten) を訪ねて

クィーンズタウンの市内にある一般的な公立の幼稚園を訪問した。園児数が70名程で教師が6名という日本から考えると町自体が小さいせいか小規模である。初めての集団生活に無理がないように、3歳の子どもたちは火曜日と木曜日の午後の保育 (Afternoon Class) から始め、次に月曜日から金曜日までの Afternoon Class になり一年間のなかで子どもの様子を見ながら4歳までには午前からのクラス (Morning Class) になるという段階をおって登園するというシステムになっている。3歳児では親と相談したなかで子どもの状態を見ながら進めるというような柔軟性をもたせている。はじめは親がずっと付きそう場合が多く少し慣れたら送り迎えだけになるということであった。午前9時頃には多くの子どもたちが登園していて、9時30分頃には全員の子どもが活動を始めた。基本的に幼稚園では自由保育がなされていた。子どもたちは、絵画や工作、絵本、コンピュータ、ごっこ遊び等の場で (写真①、②) 活動していた。この日は Afternoon Class の3歳児の子どもたちがまだ登園していなかったので50名程の子どもたちに教師が6名といった少人数体制のせいか、一人ひとりにかける言葉かけの回数も多く個々の子どもと充分関わった中での自由保育であった。その中で自分勝手な事や約束を守らないということに対してはきちんとした指導がなされていた。

(写真①)



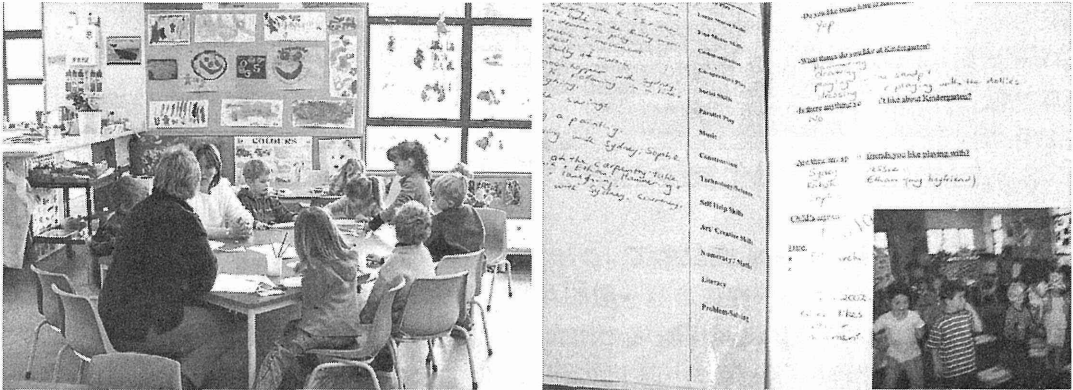
(写真②)



他の多くの幼稚園がそうであるように毎日1, 2名の親が順番で保育に参加し教師の補助をしたり, 専門的な技能を持っている親はそれを子どもたちに教えたりしている。この日も一人の母親が絵画のグループの補助をしていた(写真③)。親である事を感じさせない程アシスタントとしての意識を持ってやっており, 教師とのコミュニケーションも深まっているように感じた。教師は, 個々の子どもたちの様子や保育の内容を記録していて1年間の記録をファイルにしてあった(写真④)。

(写真③)

(写真④)



アスレチック, 器械運動, 水泳等の屋外での活動はみんな一緒に活動することになっていて, 11時頃からはマットや跳び箱遊びが始まった。「できる, できない」ということよりいろいろな器具使って運動を楽しむという活動であった。

幼稚園の中に入ってはじめて感じたことは, だれもが楽しくなるようなカラフルな色使いの部屋であることだった。机や椅子や棚は茶色, 黒板が必ず前にある, といったような固定概念はなく様々な色が使っておりそれぞれに仕切った教室はなくオープンスペースの部屋で配置も自由に変えられるようになっている。壁に張られた子どもたちの絵もいろいろな色を使ってのびのびと描かれたものが多かった。

### 3. 小学校を訪ねて

クィーンズタウンの中心地にある公立の小学校を訪問し午前の授業を参観した。低学年と高学年の教室や運動場の作りが違い, 低学年ではクラスごとの教室になってはいるが, 全体の教室の雰囲気は幼稚園とあまり変わりがないものであった。高学年の教室は前に黒板があり個々の机や椅子がグループごとに配置してあった。入学式という行事はないので, 5歳の誕生日が来た次の日から小学校へ入る。その前にVISITといって3ヶ月前から(基本的にはいつでも可能)4回ほど父母といっしょに小学校に行き, これから入るクラスで体験学習をすることができる。その間に新しい学校生活に慣れ仲間関係がスムーズにいくよう教師は気をつけているということであった。

この日は「YEAR 2」のクラスでダンス・社会・国語の授業を参観した。どのクラスも児童数が20名程度で少人数の指導がなされていて, さらに特別な技能を要する教科(美術, コンピュータ, 運動関係等)は専門的な指導ができる講師と担任教師の二人で授業をする。この日のダンスの授業(Health and Physical Well beingの領域)でも専門のインストラクターが中心になって指導し, 担任教師は子どもたちの中に入って補助をしていた。

(1) 社会科の授業

社会の授業（Social Sciences の領域）では社会科の要素別達成目標における社会学分野の社会組織（Social Organization）の LEVEL 1 および LEVEL 2（表 1）の授業であった。

ちょうど英国でマンチェスター世界陸上競技大会が行われており、連日テレビニュースでその様子が報道されていた。昨日の宿題はこのニュースを家族と見る事でありその感想などを書いたプリントをもとにグループ内で発表し合い、その後全体で話し合った。目標に沿った具体的な話し合いのテーマが提示され、それにしたがって進められていた。

- ニュースについて話し合いをする。（選手の様子をロールプレイにより発表）
- 集団（GROUP）ということに注目して話し合いを進める。
- 赤・青・黄・緑の 4 グループごとで話し合う。
- LEVEL 1（赤・黄）への提示 ・なぜ自分の国の選手を応援したくなったか。
- LEVEL 2（青・緑）への提示 ・それぞれの集団（GROUP）での役割は何か。
- それぞれのグループで話し合ったことを発表する。

教師が黒板の前で話をして子どもはそれを聞くという受身的な授業ではなく、低学年でも子どもが独自に調べたりグループごと活動したり話し合ったり（低学年ではロールプレイ等の方法で）という参加型の授業で進めていた。そのためか自分の考えを積極的に発表したり友達の考えを聞いたりする態度が身についていた。

カリキュラムにおける各レベル間の達成目標に共通性がある社会科等の教科は違うレベルでも比較的指導しやすいのではないかと感じた。また知識の伝達というより子どもたちが生きていく上での社会科であり、身近で生活に密着した問題について低学年でも自分なりの考えを持てる素地作りをしているという点で学ぶべきものがあった。

（表 1）<sup>5)</sup>

	社会組織（Social Organization）	
	社 会 学	
全体目標	・ 集団の中で人間が形成する組織	・ 集団内で相互作用する場合の権利 役割、責任
LEVEL1	・ なぜ人間は集団に属するのか	・ それぞれの集団内で果たす異なっ た役割
LEVEL2	・ 共同体や社会全体のなかで人間 はどのようにして、なぜ組織を 作るのか	・ 集団内で行動する場合の責任と 権利

## (2) 国語の授業の主な流れ（進度別学習における一斉・個別・グループ指導）

国語の授業では、進度が違う子どもたちへの指導がなされていた。

教師の指導・内容	子どもの活動
○はじめに教師が言語についての話をする (Speech makes dialogue.) 1. 大型絵本でショートストーリーの読み聞かせをし、言葉の意味を指導したりその内容について話し合う。 (一斉指導) (写真⑤)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教師のところに集まって座る。</li> <li>・座って聞く。</li> <li>・絵本の中の言葉や内容について質問したり教師の発問に答えたりする。</li> </ul>
2. 学習進度別のグループごとの指導 (進度別のグループ指導・個別指導) ・順次、同じ進度の4, 5名の子どもたちを個別に指導する。(写真⑥) ・教師がグループごとの個別指導をしている時は、補助教師(時には親の場合もある)が他のグループを指導する。 3. 本時の学習の確認をする(一斉指導)。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各グループごとのテーブルに集まり個々に教科書を読む。読み終わったらその教科書に合ったプリントの問題をする。</li> <li>・プリントをもとに自分の意見や感想をグループ内で話し合う。</li> <li>・プリントに感想をかく。</li> </ul>

一人ひとりに合った学習内容が用意されているので、出来なかったりついていかれず困ってしまったりする子どもはいなかった。子どもたちは進度別の学習に対して差別されているというような感覚はなく、自分のすべき事をしっかりと学習し出来たことに満足していた。早くやり終わると次の段階のグループのところに行きその教科書を一緒に読んでその内容について話しをしているという雰囲気であった(写真⑥)。教科書は学校や教師の裁量で決めることができ、絵本のような感じで教師が一斉指導で使った大型絵本と同じタイプのものであった。言語の指導(pronunciation, accent, spelling)は個別指導で、内容について自分の考えを持ったりまとめたりするのは補助教師の支援でグループで学習していた。小学校でも親の授業への参加や手伝いが柔軟的であり、この日も隣のクラスではコンピュータの授業で親がアシスタントとして補助をしていた。

(写真⑤)



(写真⑥)





#### 4. ニュージーランド研修のまとめ

幼稚園と小学校を訪ねて感じたことは、常に個に目が向けられているということであった。日本の教育では平等という意識が強く固定的に考えてしまいがちであるが、個々の子どもの特性を理解した中で対応し必要だということにたいしてはこだわりなく変えていく柔軟性がある。幼稚園の時から小学校の体験が出来ることや、教室の雰囲気には差がないことも子どもたちの心理的段差の軽減には大切な要素であると感じた。少人数での教育のシステムや、教師の役割が明確で学習指導に力が入れられる時間的ゆとりがあることも魅力的であった。また親が子どもたちの幼稚園や学校での様子を自分も一緒に関わったなかで知るとは、親が教育に対して理解を持ちきちんと自分たちの意見を言えるといった意味でも大切なことである。幼稚園からの積み重ねか、親も学校教育に対するしっかりとした考えを持っており、学校と一緒に子どもの教育を考えていこうとする素地が出来ている。それと同時にいつでも親が来ていいというオープンな雰囲気が感じられることも子どもにとっても親にとっても安心感があるのではないかと感じた。

日本の教師は、一斉に多くの知識・技能を伝達する指導技術や緻密な教育過程をもとにそれを実践する力は持っているが、カリキュラム開発能力や指導法の工夫ということに関しては学ぶべき点があると思った。

### V. 心理的段差や個の特性に配慮した小学校低学年教育の指導

#### 1. 心理的段差を配慮した指導

ニュージーランドにおいては、一度に多くの子どもが入学して来るということはないので個がクローズアップされた中で、新入児の子ども達の心身の発達段階や個々の特性を見ながら対応できるよさがあり、VISITという柔軟なシステムによって幼稚園から心理的段差が少ない状態で小学校生活がスタートできるというよさがある。日本においても事前の学校体験や教室内の環境構成等の工夫はしていけるのではないかと考える。そのためには幼小の教師間の相互理解も必要である。指導方法という面で今求められているのは「新入児の子ども達の心身の発達段階や個々の特性を見ながら対応する。」という部分ではないかと思う。子どもにとって学校という場が「自分に自信を持ち、楽しさを感じることが出来る。いろいろな考えが認められるという安心感を持てる。」場でなければならない。そのためには、実態を見つめ「集団行動がとれない。長時間座ってられない。」等は子どもの自然な姿であることを認めたうえで、子どもたち自身で気づいていけるような支援をし、1年かけて育てていく「ゆとり」を教師自身が持てることが大切であると考えます。

#### 2. 個々の特性を配慮した学習指導

同じクラスの中でも進度が一律ではないことが前提となっているニュージーランドでは、その子どもに合った学習内容を用意しなければならないということや、指導法を工夫しなければならないということに困難さがあるということであった。そのことに対しどのような指導をしているのかということは今回私が関心をよせていた点でもある。同時期に学習を始めても特性や個々の学習の差が出てくるということから考えて、システムは違うがその個々の状態に応じた指導という点で生かせるのではないかと考える。

そこで今までの自分の実践をもとに考えてみたい。

●個を配慮した教科学習（算数）の授業の流れ（案）

指導の内容や留意点・形態	個の特性に対する配慮
<p>1. 基本的な知識技能の指導 （一斉指導）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>一斉の指導内容や実態に適したかたちでの教材教具を工夫する。</li> <li>一斉で学習することの意味や良さについて理解し合ったうえで進める。 人の話を聞くことによって疑問点やわからないことを見つけ出すことができ質問できる。それにより他の子どもたちも問題や課題を明確化することができる。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>助け合って学習する気持ち 基本的な学習態度の指導 自分の考えを言える雰囲気作り</p> </div> <p style="text-align: center;">⇓</p> <p>日常から心がけておく点</p> <p>2. 習熟度や理解力に配慮した指導 （グループや個別指導）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>A—一斉指導では初歩的理解がまだ不充分である。</li> <li>B—もう少し基礎的練習をすることにより定着する。</li> <li>C—学習内容を理解し、次の段階の問題もできる。</li> </ul> <p>○基礎的事項の確かめに使うプリントや各グループごとの学習に適した課題を用意し、学習を進める。</p> <p>・グループ名はその時間ごとに変え名称が固定化しないよう配慮する。</p> <p>・学習を再確認できる家庭学習を準備しておく。（印をつけ自分で家庭学習を決めるようにする。）</p> <p>○各自学習の記録をカードに記録する。 例：□+△の計算が （できた・できない）</p>	<p>○事前に学習内容を理解している子</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>人より速く知っていることと、自分のものとして理解していることの違いに気づかせる。</li> </ul> <p>○理解の早い子</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>良く聞き、良く考える時間や問題について自分の考えを整理する時間の大切さを知らせる。</li> </ul> <p>○理解に時間がかかる子</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>わかったふりをせず、わからないところを見つけることの大切さを知らせる。</li> <li>わからないことは誰にでもあるという安心感を持たせるようにする。 （T・T指導が可能な場合は補教師が机間巡視しサポートする。） 基本的に T・T 指導体制による指導</li> </ul> <p>○教師 1 は A を担当する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>A のつまづいている個所の発見。</li> <li>作業や動作等を取り入れ個の生活レベルに適した具体化した指導。</li> </ul> <p>○教師 2 は B,C を担当する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>B には、わからなかった点、まだ自信がないところを確認し、いくつかの練習問題をし理解の定着化を図る。</li> <li>次の課題への意欲付けをする。</li> <li>C には、少し難しいが自分で解決できそうな問題に挑戦させあきらめず問題を解決する力をつけさせる。</li> </ul> <p>○個の段階に配慮し基本的に、子どもたちに無理がなく自分で選択できる問題を準備する。</p> <p>○できるだけ簡単に書けるものにするこの記録をもとに今後の一斉指導や個別指導の計画を立てる。</p>

注）{自分で工夫してきた点 ～～～～ 参考にしてとり入れた点 ……………}

このときは一年生 40 名教師 1 名という状況だったので、個に対応することが困難でありこの学習がスムーズにいくまでに時間がかかった。順次どこの学校でも T・T の指導体制が可能になってきたことから一斉指導場面でのサポートや個別指導でのグループ指導に T・T 指導ができるとさらに効果的である。グループ別学習では固定化しないよう各グループ間を流動的に考えたり名称を変えたりという配慮も必要である。今回コミュニケーションを大切にすることや、無理なく自分で選択でき考える問題を工夫するということはとり入れたい点であった。また学校の指導に対し日頃からの家庭の理解や協力を得ることも大切である。父母に、教師が「どのような考えで」「どのような目的で」指導しているかを「成果が見えたかたち」で説明していくことが必要だと考える。

## VI. 最後に

学校教育においては、仲間と学習したことにより達成感や自分に自信を持てるような学習指導ができる教師の指導力は重要であると思う。そこには人と人との高まり合おうとする気持ちが存在していなければならないだろう。日々の教育活動に取り組むなかで、教師は視野が狭まり「こうあるべきだ。」という固定概念が先行し、新しいものやいろいろな考えを受け入れ難い感覚を持ってしまっていないだろうか。いろいろな方法や考えを子どもと共有していかれる柔軟性を持つことがこれからの指導には大切であると感じた。今回、日本から一歩離れ外を見ることによって他の国の教育で学ぶべきことや参考にすべきことがいろいろ見えてきた。またそのことによって日本の教育のよさも見えてくる。このことを再認識できたことは今回の研修の大きな成果であった。

## 参考・引用文献

- 1) 毎日新聞 2002 年 8 月 24 日朝刊「校内暴力は減少」
- 2) 毎日新聞 2002 年 8 月 27 日朝刊「県小中高問題行動調査」
- 3) 山梨大学教育人間科学部附属幼稚園公開保育研究会研究資料 2002 年 6 月 21 日
- 4), 5) ニュージーランドの教育制度学習資料 (Mount Aspiring College)